

てんぐのかくれみの

(日本の昔話)

昔、ある村に、ずるがしこい男の子がいました。ある日、男の子は、山の上で竹のつをのぞきながら、大声で言いました。「わあ、遠くの町まで、よく見えるぞ。」

その声を聞いて、山にすむてんぐがやってきました。「その竹のつつは、そんなに遠くまで見えるのか。わしのかくれみのと取りかえてくれ。」

かくれみのは、着るとすがたが見えなくなる、ふしぎなみのです。男の子は、喜んで取りかえ、すぐに山をかけ下りました。てんぐが竹のつつをのぞいても、何も見えません。だまされたときには、男の子はもう、いなくなっていました。

男の子は、かくれみのを着て、村の店のお菓子をこっそり食べたり、人の家に入つてごちそうを食べたりして、いたずらを続けました。

ある日、男の子の母親が、きたないみを見つけて、かまどで燃やしてしまいました。男の子は、残った灰を体にくりつけてみました。すると、また、すがたが消えま
した。

ところが、酒を飲んで口のまわりの灰はいが取れ、口だけが見えるようになりました。村の人たちに見つかった男の子は、追いかけられて、川に飛びこみました。灰はいはすっかり流れ落ち、男の子はみんなの前ではだかのまま、はずかしい思いをしたということです。

男の子は、何をのぞいていましたか。

[illegible]

2 かくれみのは、どんなみのですか。

ア 着るとすがたが見えなくなる。

イ
着ると空を飛べる。

ウ 着ると力が強くなる。

3 てんぐが、竹のつとかくれみのを取りかえたのは、どうしてですか

--	--

4 男の子が、さいごにはずかしい思いをしたのは、どうしてですか

ア
川に飛びこんで、
灰が流れ落ちたから。

イ 母親にしかれたから。

ウ てんぐにつかまったから。